

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	13
瑪瑙集	26
紅玉集	28
俳誌交歓	29
7月号月評	30
惠贈俳誌拝見(8)	32
惠贈句集拝見(34)	34
エッセイ「美への憧憬」	35
「俳句好きですか」	37
特別作品「春のプロヴァンスを訪ねて」	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
他誌転載	45
妣の国父の蒼天(28)	46
南禅寺・哲学の道吟行	48
エッセイ「佛様の言葉」	50

今月の一句

ほととぎす雲に孤独の濡るとき
桂樟蹊子

(昭和六十一年作)

木曾は桂樟蹊子の好まれた吟行地である。そのときの注釈に、「旅は孤独であるとたまたま思い、芭蕉は曾良と奥の細値を羨ましく思い合わせていたときであったから、何か心に沁みる時鳥の声であった。ひとしおに孤独の旅が胸一杯になる」当時こつこつと自分の足で歩かれた師の孤独な姿が浮ぶ。

逝去されたのは平成五年であるからこの句を作られてから八年後、八十四歳の呆気ないお別れであった。
隆子

薔薇の鉢

塩路隆子

咲き満ちし命惜しめり鉄線花
昨日けふ臍腑重たし走り梅雨
若葉冷ホットミルクにブランデー
新緑に鎮もる五欲深呼吸
嫁がせて後の目高を殖やしけり
逢ふときは紫衣と決めをり藤の下
ふさぎ虫封じに買へり薔薇の鉢

五月号光耀抄

塩路 隆子選

城あらば滅びのドラマ朧月
頼寄せて牛との別れ青葉寒
黒猫の背は思考中聖五月
梨咲いて水色の月のぼりけり
春の野に百の仏を置きて去る
たをやめの野良着姿や藤の花
水牛に島唄のせて若葉径
喪の服のみな美しき桜の夜
洒落つ気が風評被害四月馬鹿
小津館は昭和の匂ひ麦の秋
ヒューズ飛ぶ闇のありけり昭和の日
経回りし大和まほろば桃花
虎杖の茎いきいきと野の香り
野地蔵の肩に触れ合ふ踊子草
雨欲しと離島古池蛙鳴く
白木蓮少女の肢体すらりとし
朝採りの筍積みて道の駅

松岡 和子
小澤 菜美
宮田 香
落合 晃
伊東 和子
増山 一代
藤見佳楠子
和田 郁子
北尾 章郎
田下 宮子
中村ふく子
坂根 宏子
中川すみ子
長濱 順子
難波 篤直
西垣 順子
西田 史郎

風評に耳は貸さぬよ五月来る
 昭和の日鉛筆削る肥後守
 妹がひとりほしいな鯉幟
 川端に戻る静けさ花は葉に
 風光るパープル色に母の髪
 若蘆や友晩年の男振り
 遊ぶ嬰にこぼれて白き雪柳
 茶問屋の八十八夜紅襪
 ジープより響く草笛峡暮し
 小松菜の緑誇らし煮物皿
 スーパーの新玉葱の一個売り
 綿菓子のパック気に入り祭の子
 乾坤のあはひの使者や告天子
 菖蒲湯に浸り願ふは「私の日」
 壬生の鉦いよよ激しく蜘蛛退治
 春暖炉缶の灯油を使ひ切り
 手話で聞く原発ニュース四月尽
 ほのかなり花萼点る夕の庭
 河鹿鳴く一乗谷に湯殿跡
 朧夜の遠き鐘の音亡夫かとも

阪本 哲弘
 塩路 五郎
 伊藤 憲子
 伊藤 純子
 前川 ユキ子
 大島 みよし
 大松 一枝
 山口 キミコ
 石川 かおり
 松田 和子
 伊庭 玲子
 竹内 悦子
 中本 吉信
 寺田 光香
 栗倉 昌子
 谷口 俊郎
 森下 庸子
 坂上 香菜
 鈴木 照子
 小林 成子

山藤や春日の杜の釣り燈籠
 放射禍の牛の行方や春愁ひ
 朝湯して伊吹風の春寒き
 豌豆の明日へあすへと咲き継げる
 田水張り村は輝き取り戻す
 絶品の母の味ですよもぎ餅
 「しなの」待つ〇番線や端午の日
 陽炎や自動販売機の卵
 忽然と老鶯啼けり虚子の墓
 わたし四歳口とがらせて入園児
 ビルの間にオアシスのあり木の芽風
 金婚のスカーフ派手目花の宴
 児の背中大きく見ゆる新学期
 穏やかに動き出す海若葉どき
 恙なき母に送られ花の道
 先生が好き友達が好き新一年
 自負心を脱ぐまで鹿の袋角
 夏近きゲゲの茶房賑はひて
 竹林にこぼる雀麗なり
 母の日やエプロンかけて何もせず

笠井 清佑
 高谷 栄一
 川崎 利子
 杉本 綾
 能勢 栄子
 井口 淳子
 安本 恵子
 吉田 希望
 大越 義雄
 宮崎左智子
 三川美代子
 秦 和子
 福本すみ子
 藤本 秀機
 中井登喜子
 新実 貞子
 常田 創
 土井くみこ
 田中 浅子
 辻 香秀

水郷の墨絵ぼかしや余花の風
 春うらら欠伸移して電車降り
 児らの手に飴束ほどのクローバー
 黙々と異郷の田打つ被災人
 みちのくへみんなのエール「春よ来い」
 山笑ふ真清水を背に不動尊
 裸婦像の身をくねらせて炎暑来る
 にぎりめしと新茶リュックにローカル線
 湯わかしを卓に二つの桜漬
 町衆の伝へをいまに壬生の鉦
 風ふはり蒲公英は絮放ちけり
 我儘を聞いてよ薔薇のひとり言
 汗ひかる勝者敗者の区別なく
 研修医の眩しき白衣新樹風
 青田波ひたひた寄せる夕餉どき
 里の風呂蛙あまたの声を聞き
 土の中命はぐくむ夏の雨
 子供の日児と戯れの徒競走
 こでまりの花の寡黙や風の筋

辻 知代子
 笹井 康夫
 佐用 圭子
 片岡久美子
 桂 敦子
 木戸 宏子
 紀川 和子
 小林 久子
 五十嵐 勉
 飯田美千子
 稲田 和子
 和田森早苗
 岡 佳代子
 吉田 晴子
 松田 洋子
 山崎 里美
 山崎 真義
 山本 節子
 山本 孝夫

琥珀集

牛蛙

小澤 菜美

頬寄せて牛との別れ青葉寒

製材所昏れても松の香牛蛙

野漆や活断層のあるあたり

鮎子の旨しことさら汚染など

浜食堂のお内儀かみ元氣や南風吹き

競べ馬の疾風に揺るる賀茂の杜

牡丹散る音聞かむとて夕座敷

蝌蚪の群

松岡 和子

離るるも寄るも梵字や蝌蚪の群

菜の花を飾り獅子舞待つ甲賀

もてなしは災り春菜の昆布締め

城あらば滅びのドラマ朧月

若葉風御堂の鯨のいよよ反り

アールグレー琥珀に透ける春の朝

産土の檜皮本殿花の雲

聖五月

宮田 香

紫雲英咲き始動の田畑はしゃぎけり

黒猫の背は思考中聖五月

葉桜のざはめく力漲りて

子供の日仮面ライダー好む父

筍を湯搔く香りの懐かしき

山吹を冠として道祖神

復興の兆し見せたり皐月賞

鳥曇り

駅までの近路遠し春の泥
おち合うて変る川の名芦の角
堤より梨棚低し風ひかる
梨咲いて水色の月のぼりけり
月余経て今なほ余震菜種梅雨
音信の途絶えし友や鳥曇り
生還を恥ぢし日も過去昭和の日

落合 晃

靄がかる蹴上のさつき三分咲き
たをやめの野良着姿や藤の花
安曇野や五月の風のさくら色
笹舟を列なし流す夏はじめ
近江野にますらをひとり麦畑
おしまひ（こんぼんは）な隣家老婆の夏衣
白米に少し加へて麦の飯

藤の花

増田 一代

花過ぎ

春草の深き野の道仏みち
化野のはかなさに触れ春愁ふ
子仏に傘を貸したし春の雨
春の野に百の仏を置きて去る
嘆きいや笑ひ暮春の羅漢群
花過ぎの手にたよりなき紙コップ
春驟雨にくもれる絵柄茶碗坂

伊東 和子

牡丹籠

田下宮子

牡丹籠背負ひて島へ行商女
北斎の浪裏暗し館薄暮
地凶指して天気予報士「走り梅雨」
手機織る箴の手捌き夏立ちぬ
梶あぐ木綿問屋の緑立つ
小津館は昭和の匂ひ麦の秋（小津安二郎）
藤咲けば風藤色の城の跡

島唄

藤見佳楠子

花水木

和田 郁子

青嵐の南国情緒椰子並木（石垣島三句）

エメラルド溶かせしかとも夏の海（川平湾）
（かびら）

鐘乳洞は神の手遊び滴れる

魔除獅子の睨む垣内島バナナ（竹窟島四句）
（シイサ）

ハイビスカス髪に一輪島乙女

芭蕉布織る機音の窓日焼顔

水牛に島唄のせて若葉径

がんばります

北尾章郎

緑蔭

中村ふく子

幸ここに常なるくらし春炬燵

勿忘草「がんばります」と温泉宿より

原発を指呼に八十八夜かな

春告鳥のこゑの虚しさ津波あと

洒落っ気が風評被害四月馬鹿

老年に賜る余生鹿めく

れんげうの盛り狭庭をせばめけり

喪の服のみな美しき桜の夜

葉桜の公園喫茶ハーブティー

花水木咲く窓辺よりポロネーズ

葉桜の風のささやき川に沿ひ

朝穫りの筍無念白き疵

蝶々のゆらゆら土手のランデブー

春深しゲートボールの音ひびき

緑蔭に将棋指す人煽る人

美人画の余韻嫋々花吹雪

「つぐら・さくら」三春の桜地震に耐へ

ヒューズ飛ぶ闇のありけり昭和の日

雁風呂や瓦礫となりし村の跡

花会式鬼を鎮める菩薩かな

遊覧船マストに泳ぐ鯉のぼり

鈴たすき

坂根 宏子

踊子草

長濱 順子

霞みたる三輪へ入山鈴たすき
経回りし大和まほろば桃の花
山脈はやまなみバステルカラー春日和
石垣の日向熟睡の蛇蜥蜴
被災地へ送る絵本や若葉萌え
市松の模様の茶室うららなり (桂離宮)
石庭に枝垂桜の影揺るる

野地蔵の肩に触れ合ふ踊子草
静けさの葉桜もよし遊歩道
登校の列真つ直ぐやチューリップ
若き娘の着信音やうららかに
満天星の鈴の音聞こえ京町家
久闊の友赤き杖日雀鳴く
筍を茹でる香流れ夕厨

視野検査

中川すみ子

蛙鳴く

難波 篤直

虎杖の茎生きいきと野の香り
視野検査終へれば辺り夕霞
糠付きの筍賜ふ産地より
電池替へし辞書を頼りに春の宵
うぶすなの空を被ひし花の雲
水やりは楽しき日課黄楊の花
キャリアーバッグ立てて湖岸の遅桜

川の面に触れむばかりや初燕
春霞比叡愛宕を包み込み
雨欲しと離島古池蛙鳴く
玉川の花を見守る小町塚
気の早い蜥蜴ちよろちよろ日のかげり
宿木を覆ひかくせり花の雲
山裾を花の香浮かべ川流る

紅枝垂

白木蓮少女の肢体すらりとし
十石舟の岸辺彩どる花回廊
沸き立つごと今盛りなり紅枝垂
一面を桃色に染め桜蔭
丘覆ふ百花練乱花に酔ふ
香り高き白き花々夕櫻（御室櫻）
再開の水族館に春笑まひ

西垣 順子

戦場と見紛ふ惨や遠桜
風評に耳は貸さぬよ五月来る
翩翩と瓦礫の中の鯉幟
花筵企業戦士は見当たらず
日輪の不機嫌募る霾ぐもり
藤棚や昭和を語る車椅子
水仕終へ妻口遊ぶ朧の夜

阪本 哲弘

筍

朝採りの筍積みて道の駅
春愁やありし日の友父母のこと
ふるさとは都忘れの頃なりし
六月は吾が誕生日誘ひ待つ
濃く淡く藤房伝ふ雨雫
あれこれと鏡の前の更衣
灯台の庭園芝生蘇鉄咲き

西田 史郎

昭和の日

花粉症にかかりし野猿涙ぐむ
万緑の生氣全山動かせる
毛虫焼く男の意地の一徹に
昭和の日鉛筆削る肥後守
父の日や楽譜を読めぬハーモニカ
湯上りの爪やはらかし若葉の夜
鉄線花褒めて帰りぬ御用聞き

塩路 五郎

水自慢

伊藤 憲子

妹がひとりほしいな鯉職
子の胸の小さきふくらみさくらんぼ
向日葵の大きな顔に迎へられ
山吹の花にたはむれ鯉の群
京野菜をビビンバ風に春料理
月光仏斜から見ても涼しかり
新緑に村人の笑み水自慢

立 夏

伊藤 純子

川端に戻る静けさは花は葉に
別れには立夏の日差し明るすぎ
蔵屋敷跡はビル群春惜しむ
薫風や堂縁占むる遠忌衆
母の日を母となりたる子に祝がれ
師を訪ふに爪先上り坂薄暑
図書館の静寂春光届かざり

豆の飯

前川ユキ子

若葉風水琴窟の余韻かな
風光るパープル色に母の髪
食卓はけふもふたりよ豆の飯
観音の指の艶めき多佳子の忌
二の腕の恥ぢらひ少し更衣
児に疲れ児に癒やさるる子供の日
夕薄暑塾帰りの児駈けゆけり

昭和の日

大島みよし

昭和の日昭和を偲ぶこと多し
若蘆を辿れば真直ぐ谷戸の道
若蘆や友晩年の男振り
春愁や人智及ばぬことあまた
近頃は国旗掲げず昭和の日
筍の等高線のごとき皮
端午の日野の風音に耳を貸し

雪柳

大松 一枝

豆の飯

石川かおり

被災児の笑顔うれしき子供の日
瓦礫なか祈りは深し春の供花
遊ぶ嬰にこぼれて白き雪柳
春筍炊きて娘を待つひとり刻
郵便は子よりの俳誌うららの日
帰るさにそつと夫の手暮の春（夫人院）
老いたれば春の蚊逃がす迂闊かな

ジープより響く草笛峽暮し
青蛙につられてジャンプ夫の背
手捻りの器に盛られ豆の飯
茶間屋の軒から軒へ夏つばめ
山肌に透き通る白余花盛り
太陽の光あつめて柿若葉
緩急の雲の流れや走り梅雨

楠若葉

山口キミコ

小松菜煮びたし

松田 和子

仰ぎ見て生氣もらひし楠若葉
パレードの異国ロイヤル昭和の日
覆ひ内賑はふ朝や茶摘み季
茶間屋の八十八夜紅禪
修復の弥陀に映れる若楓
宇治川の桜ラインの幾曲がり
松葉杖載せてドライブうららの日

小松菜の緑誇らし煮物皿
新緑に癒されそぞろ夫婦道
秀吉の御土居おどいや今も青葉風
竹筆の文字勇ましや風薫り
寝姿の大山だいでん優し春霞
目の前に萌ゆる牡丹の競ひ咲き
咲き誇り牡丹日和や恋多き

七月号月評

塩路 隆子

六月に吟行する志摩周辺は、桂樟蹊子の好きな吟行地であった。その志摩周辺の師の句を探しているときに、たまたま当時の師の年齢の逆算を試みた。「東海道俳句の旅」の宿を踏破されたのは七十五歳。その後日本列島を囲む島々を巡ろうと計画された、一カ月後、呆気ないお別れを告げられた。八十四歳の時であった。その寸前まで俳句に対する情熱を失われず感覚の新しい句を作り続けておられた情熱に肖りたいと思うこと頻りであった。

今月は琥珀集から月評をさせていただきます。

城あらは滅びのドラマ 臙月

松岡 和子

大河ドラマ「姫たちの戦国時代」を観ても分かるように姉妹の居城はつぎつぎと戦に破れ城を追われる歴史を追っている。まさに「滅びのドラマ」である。それらからヒントを得ての作句であろうがうまくまとめられた。「滅びのドラマ」の措辞が哀愁を誘う。季語「臙月」が混沌とした世を表現するために使われたのかも知れない。

「春満月」などを使っても良いと思われる。

頼よせて牛との別れ 青葉寒

小澤 菜美

放射能汚染による立ち退きを宣告された地域での出来事であろう。涙なしでは見られない光景を作者はご覧になったのであろう。やせ細った牛に久々に餌を与える一時帰宅の酪農家や牛の養育に携わってきた人たちの苦悩は計りしれないものがある。これに対する保証は未だになされていない様子が苛立ちを覚えるのは、当時は勿論のこと胸が抉られる思いである。季語「青葉寒」が効いている作品である。

黒猫の背は思考中 聖五月

宮田 香

飼う側には猫派と犬派とがあるそうだが、時々猫の句が出てくるので作者は猫派のようである。俳句の素材としては犬よりも猫の方が扱い易いように思う。特に黒猫と云うのは、見方によっては妖艶にも、生意気にも見える。作者は哲学者のように捉えられた。ロダンの「考える人」の像も背中を丸くして考えている。連想として猫の背中にそれが感じられるのは作者の手腕である。中七の「背は思考中」の措辞によるものであろう。

(以下略)